



お盆の思い出

駒澤大学名誉教授

佐々木宏幹

仏教企画通信

発行日 | 令和2年9月1日

61号

発行所 | 有限会社 仏教企画
〒252-0116
神奈川県相模原市緑区城山4-2-5
Tel. 042-703-8641
Fax. 042-782-5117

発行人 | 有限会社 仏教企画代表 藤木隆宣
Email | fujiki@water.ocn.ne.jp

お盆とお正月

東北地方の田舎、と言ってもここでは宮城県気仙沼市の田舎地域を指しているのだが、何かあって普段食べていないような食物がでると、大人たちは「お盆とお正月が一緒にきたようだ」と言っていたのを記憶している。

もうかれこれ八十年近く前のことである。その頃の東北の農村は特別な家、つまり地主土地持ちを除くと、貧しい農家が多かった。

そんな貧しい人びとでも一杯ご馳走をつくって食べるのがお盆とお正月であった。

この二つの年中行事に人びとは晴れ着を身につけて隣り近所の家々に挨拶回りをしたものである。子どもたち、とくに女の子は新しく着物や服をつくってもらうと、お盆やお正月に着るために普段は大切に仕舞っておいた。晴れ着は特別な着物、普段は仕事着である。

民俗学には「ハレ」(晴れ)と「ケ」(曇)という用語があり、

「ハレ」があらたまつた特別な場や時を意味し、これにたいして「ケ」は普通のありふれた時や状態を指す。

日本人の伝統社会、ことに地域社会においてはすでに触れたように、お盆やお正月とともにさまざまな「ハレ」の日を創りだした。

たとえば通過儀礼とか人生儀礼とか呼ばれる誕生、成人結婚、厄年、葬儀、追善などの諸行事は「特別な日」であるがゆえに「ハレ」の日なのである。

誕生や成人、結婚が「ハレの日」というのは分かるが、厄年や葬儀をもハレのカテゴリーに含めるのは、いかがなものかと疑問に思う人もいるかもしれない。それではこれらの日が「ケ」(曇)の日かというところを決してそうとはいえない。これらの日は普通の「ありふれた日」ではないからである。日本の諸儀礼は「ハレ」か「ケ」かの二元論でではとても理解できないと言えるのではないか。

日本の諸儀礼が二元論では割り切れないのに、欧米流の「聖」(sacred)と「俗」(profane)なる二元論を「ハレ」と「ケ」に当てはめようとしたことがそもそも無理ではなかったのか。

日本の儀礼は「ハレ」、「ケ」、「ケガレ」(穢れ)を含む多様な弾力性に富むものではないかといった問題が、かつて民族学会や文化人類学会で討論されたことがある。いま思うととても懐かしい。本題の「お盆」に戻ろう。

お盆は「盂蘭盆」という語の略称である。本来はサンスクリット語の Ullambana (ウランバナ) の音写語で漢字では「烏藍婆拏」と書かれた。意味は「倒懸」(さかき吊りの苦しみ)である。

『盂蘭盆経』に説くところでは、釈尊の弟子のなかでも神通第一とされた目連尊者が地獄で苦しむ自分の母を、地獄から救い出したことがお盆の起源とされている。

くわしくは、死んだ母が餓鬼道に堕ちて苦しんでいるのを知った目連が仏の教えに従って、七月十五日に僧たちが修行中に犯した罪を告白する「自恣」に際して、食物などの布施をしたところ、その功德により母親は救われたというもの。この「目連救母説話」は先祖の霊を苦惱世界より救いだすという「盂蘭盆会」の仏事を生みだし、中国より日本に伝来して「お盆」として現に民衆に営まれている。

お盆行事は、僧自恣、布施、中国の中元(陰曆七月十五日は、もとは道教の行事であったが、仏教に取り入れられた)と「孝」の思想が結合し、先祖供養の欠かせない仏事となった。

昭和十年代(一九三五)私が小学校に入学した頃、「修身」という科目で先生たちが強調したのは「親孝行」であり、そのモデルは二宮金次郎(尊徳)であった。小学校には金次郎が薪を背負って歩きながら読書する銅像が建てられていた。

金次郎が仏教とどう関係したかは分からないが、日本仏教が一般に「葬式仏教」と呼ばれていることからすると、「孝の思想」→「先祖供養」→「日本仏教」という図式は可能であり、この図式に二宮金次郎が関係ないとは言えない。

お盆と「五木の子守唄」

この国では地方に住んでいる人たち(農山漁村民)がお正月とお盆には土産を手土産に帰るといふ習慣がある。帰省とか里帰りと言う。一般の家では長男が後継ぎとして家に残り、二、三男や姉妹が都市部や仕事のあるところに出て行って働いた。こういう人たちは正月とお盆には休暇を取って里帰りする慣行は現に見られる。

田舎に残った人たちは今度某々が帰省するときには何を買ってきてくれるかと期待し楽しみにしていたものである。「お土産」は自分の家の分だけではなく隣の家の分も用意する必要があった。気配りのない人は評判が良くなかった。

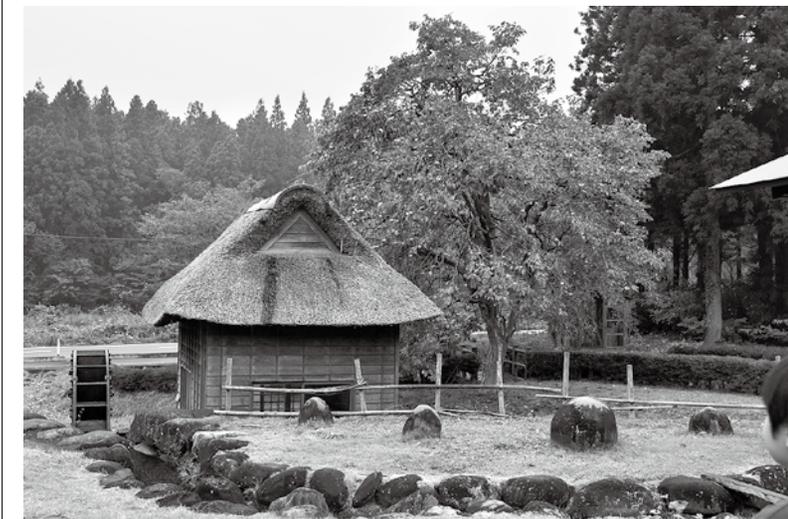
こうした社会の在り方は「義理と人情の世界」と呼ばれ、敗戦後は封建社会の残滓として、とくに知識人から批判されるが多かった。

戦後五十年以上も経ったのだから、故郷重視の傾向は廃れ

るか弱体化したか、どうだろう。私はかなり以前からお盆とお正月が近づくと新聞やテレビの報道に注目することにしている。私感ではどうもそう激しく変化しているとは思えないのだが、どうか。

暦の上では多くの人たちは旧暦(月遅れ)によつて動いているようである。お盆だと八月盆である。八月十日過ぎた頃からテレビは「お盆帰り風景」を放映しだす。北の玄関口「上野駅」が大映しされ、大型のキャリーケースやリュックサックを携えた人たちが列車に急ぐ姿がある。

こうした人びとの姿を目にしているとき、どういふ訳か分からないが私の頭に浮かぶのは「五木の子守唄」である。あるいは知らない人もおられるかもしれないので少し説明しておこう。



前回から「廣大圓滿無礙大悲心陀羅尼」の解説を始めました。しかし、本経全体が音訳で真言のようになってしまったが、今回からはその中で但姪他 (sad yatha)「すなわち以下の如し」として、実際の真言が始まります。多くの手観音の異名が述べられていますが、その内容は青頸観音であり、ヒンドゥー教のシヴァ神とのシンクレティズム(宗教的習合)の実際がうかがわれ、大変興味深いものです。

曹洞宗で唱えられるダラニ經典

大悲心陀羅尼

第四回

『大悲心陀羅尼』の真言

東洋大学文学部教授 渡辺章悟

『千手千眼觀世音菩薩廣大圓滿無礙大悲心陀羅尼經』 「唐西天竺沙門伽梵達摩譯」

	和訳	語句の註解
恒姪他	すなわち、次の如し。 “オーン、観察する者よ、	「とーじーとー」はタッドヤター (tadyathā すなわち、次の如し) で、以下に陀羅尼や真言が述べられる。
唵		「えん」は、以下に述べられる真言の冒頭に付される聖語オーン (om)。ほとんどの大蔵経のテキストではこの聖語を含むが、敦煌写本、春日版、高麗藏系などでは含まれていない。
阿婆盧醜		「おーぼーりよーきー」(阿婆盧醜) は、アヴァローケー (avaloke)。動詞アヴァローク (ava√lok 見る、観察する) から作られた名詞、アヴァローカ (avaloka) の呼格である。「[慈悲を持って] 観察する者よ」という意味で、観音菩薩のこと。ただし、金剛智訳 (N.1061) の悉曇やチベット語訳のように、アーローケー (āloke) とする資料もある。これも動詞「アローク」(ā√lok) から作られた名詞アローカ (āloka 光明、観察者) の呼格である。
世間を超えた者よ、おお、ハリよ、		「るーぎゃーちーきやーらーちー」で、「世間を超えたものよ」という意味。ロカテイ (盧遮帝 lokate)、キャラテイ (迦羅帝 krānte) の二語に切っているが、正しくは、ローカーティクラーンター (lokātīkrāntē) で、ローカ (世間) をアティクラーンタ (超越したもの) という複合語の呼格。金剛智訳でも同様に、「迦引底訶囉二合諦」と読む。ただし、不空訳『青頸経』の悉曇では前の句と結合してアヴァローカローカター (avalokalokate 世間を観察する者よ)、クラーンター (krānte 超越者よ) とするが、音訳では「阿婆盧醜 盧遮帝 迦羅帝」とあり、伽梵達摩訳と同一。
夷醜唎		「いーきり」は、へー・ハレー (夷醜唎 he hare)。へー (he) は「オー」とか「アー」とか言う間投詞、ハレー (hare) は、ヴィシュヌ神やシヴァ神やインドラ神の異名ハリ (hari) の呼格。ここではシヴァ神と同一化した青頸観音を指すとみなし、「おー、ハリよ」と訳しておく。不空訳 (No.1111 『青頸経』) や金剛地智訳 (No.1112) では、へー・へー・ハレー (呬呬賀囉 呬呬呵梨 he he hare) とする。なお、宗門の慣例では以下の摩訶と続けて「いーきりもーこー」と切って読むが間違い。
偉大なる菩薩よ、菩薩よ、菩薩よ、私の心真言を憶念せよ、憶念せよ、		「もーこーぶじきーとー」(摩訶菩提薩埵) はマハーボディサットヴァ (mahābodhisattva 偉大なる修行者) の音訳で、偉大なる (maha 摩訶) ・修行者 (bodhisattva 菩提薩埵=菩薩) の呼格。
薩婆薩婆		「さーぼー」は「すべての」を意味するサルヴァ (sarva 薩婆) を繰り返したものである。不空訳 (No.113B) の悉曇でもそのように書かれている。なお不空訳 (同、No.1064) では香積菩薩が五万の鬼兵を従者として引き連れてくることと注釈する。ただし、チベット語訳 (北京版 No.368) ではボディサットヴァ (菩薩よ) と繰り返す。この場合には薩婆は菩提薩埵の省略形か。ここではその意味で「菩薩よ、菩薩よ」としておく。なお、ここから二語の繰り返しの形式が始まる。
摩羅摩羅		「もーらー」(摩羅) は、死や障害を意味するマラ (mara) あるいはマーラ (māra) の呼格で、「悪魔よ、悪魔よ」との意味か。また、不空訳 (No.113B) の悉曇ではマラ マラ (mala mala) 「穢れよ、穢れよ」とする。ただし、動詞スMRI√smṛ (記憶する、憶念する) の命令形で、「私の真言を」[記憶せよ、記憶せよ] (スマラ スマラ smara smara) と解釈することもできる。今はこの解釈に従っておく。この場合には、次のフリダヤ (hrdaya 心真言) を目的語とする。
摩【醜】摩醜唎駄孕		「もーきーもーきー」(摩醜摩醜) の最初の「きー」[醜] はとるべきか。春日版、敦煌写本、高麗藏系、不空訳 (No.113B) では「摩摩 醜唎駄孕」とする。これらによれば、ママ フリダヤン (mama hrdayam 摩摩 醜唎駄孕) で、「私の心真言を」の意味となる。
俱盧俱盧羯	行為をなしたまえ、なしたまえ。保持せよ、保持せよ、ドフル、ドフル、勝利者よ。	俱盧俱盧羯 Kuru kuru karmam (行為を為せ、為せ)。『敦煌宝蔵』(No.7461, 7462) では、「俱盧俱盧羯」とする。「けーもー」(羯) はカルマン (karmam 行為) の目的格。
度盧度盧		「とーりよ」(度盧) は不空訳 (No.113B) の悉曇ではドフル (dhulu) であり、擬音語であろう。「とーりよー・とーりよー」(dhulu dhulu) は「無意味語の反復」とする解釈もある。
罰闍耶帝		「ほじゃやちい」(罰闍耶帝) は、「勝利する・征服する」を意味する動詞ヴィジイ (vi-√ji) の形容詞、あるいは名詞ヴィジャヤンタ (vijayanta) 「勝利を得た、戦勝者」の呼格ヴィジャヤンター (vijayante 勝利者よ) であろう。ただし、不空訳『青頸経』(No.1111) にはこの語を欠く。

この歌は熊本県球磨郡五木村に伝わる子守唄で、熊本県を代表する民謡として有名である。しかも「お盆」についての唄である。「子守唄」とされる歌には、「子どもをあやし寝かしつけるための歌」と、「守り子唄」と呼ばれる、子守りをする少女が、自分自身の不幸な身分や境遇を歌詞に織り込んで子どもに唄って聴かせ、みずからを慰めるための歌とあるとされる。「五木の子守唄」は「守り子唄」のひとつである。歌詞は次のようなもの。

一 おどま盆ぎり盆ぎり
盆から先きやおらんと
盆が早よ来るりや早よもどる

「大意 自分がここにいられるのは、お盆までで、お盆から先はいない。お盆が早く来れば早く(実家に)戻れるのに」

二 おどま勸進勸進(※)
あん人たちやよか衆
よか衆よか帯よか着物
「大意 私は小作人で物乞いのような者だ。それにくらべてあの人たちはお金持ちであり、良い帯を締めて立派な着物を着ている」

※ここでは五木村の地主層「三十人衆」にたいする「小作人」、ひいては「物乞いのような身分の者」を意味する語
三 おどんが打つ死んだちゆうて
誰が泣いてくりよか
うらの松山蟬が鳴く
「大意 自分が死んだからと

いつて誰が泣いてくれるだろうか。裏の松山の蟬が鳴くだけだろう」

右に記したように「五木の子守唄」は地主にたいする小作人、しかも出稼ぎの人の唄である。

実際、一九五二年に「農地法」が制定されて、耕作者がその農地を所有することが最も適当であると認められる立場から、耕作者の農地取得の促進とその権利の保護、土地利用の調整を図るために制定された農地に関する基本法(農地法)が出現するまでは、小作人の立場は悲惨そのものであった。私は地主が小作人を大声で怒鳴りつけるのを目にしたことがある。

初俵に入れた初物の量が十分でないと言つて、地主が激怒し大声を挙げたのである。小作人は仲間たちの面前で手をついてひたすら謝るしかなかったのである。

私は大人の世界の非情な一面を観た思いがした。

「お盆」と忘れえぬことども

お盆とお正月は日本人にとって二大年中行事であるが、前者は仏教が、後者は神道が主に受け持ってきた。私の祖父(母方)は七十二歳で遷化した(旧暦盆(八月)を営んでおり、六月頃になるとしきりに「今年も盆がくる。忙しくなる」と檀信徒に話すのが常だった。元氣な人で、檀信徒の間では「大声の和尚さん」

として知られていた。檀信徒のなかに地主のUさんという大声で話す人があり、よくお寺に来て祖父と長話をするのが常だった。二人が熱心に話したすと、まるで大喧嘩が始まったかのようだった。特に時局の問題について意見が合わないと、まさに喧嘩腰であった。互いに大声をだし合うので近くの農家の人たちは「今日はお寺にUさんがきている」と噂し合うほどであった。

お盆が近づくとUさんは、自分の家の墓の手入れや草取りなどでよく寺にきた。檀信徒はそのことをよく知っており、お盆が近づくと、またお寺から大声が聞えるぞと噂し合うのだった。

あるお盆にUさんは酒に酔って寺を訪ね、ひとしきり大声を挙げたのち、ふらつきながら家に帰る途中、農家の人たちが肥料用に糞尿をためておく「溜め」に落つちて全身糞尿にまみれたことがあり人びとは「バチが当たった!」と噂し合ったという。これを機にUさんは断酒したという。

私がお寺に住んでいた頃、いつもお盆になると思いつく人がいた。Tさんという五十歳くらいの男性で、地主でもなく小作人でもない、言わば風来坊であったが、よくお寺に来て檀家へのお符配りや薪割りなど雑用をこなしてくれていた。

私は幼少の頃、よく健康を害したが、その際私をおんぶして掛り付けの医師のところ



まで連れて行ってくれたのはTさんであった。Tさんは周囲からT「あんこ」と呼ばれていたが、「あんこ」は「おじさん」ほどの意味で、中年男性への親称であった。T「あんこ」には女の子が二人いた。彼は妻と二人の娘を養うために、夏になると樺太に出かけ鮭を獲った。樺太から帰ると、彼は必ず大ぶりの塩鮭一尾を寺に持参し、「お蔭さまで無事帰りました」と挨拶した。

その彼の死は悲劇的であった。彼は秋になって柿の実が熟した頃、娘たちに柿を食べたいと言われ、他人の柿の木によじ上って柿の実を二つ盗った。そこを他人に見つかり「泥棒!」と叫ばれた。彼はみずから首を吊って果てた。それを耳にした私は激しいショックでしばらくの間眠れなかった。

小学校への行き還りに、私はT「あんこ」の小さな墓に合掌

しないではいられなかった。毎年お盆がくると、私は幼い頃過ごしたお寺での生活をあれこれと思い出す。

既述のように、お盆は旧暦八月の十三日から十六日までであったと記憶している。この四日間のお寺の食物は普段とは異なっていた。当然精進料理であったが、汁が忘れられない。中に入っていた具が、滑子、椎茸、豆腐、蒟蒻、油揚げ、茗荷、筍などであり、醤油で味付けし、片栗粉を溶かし入れてとろみを付けていた。「茗荷汁」と呼んでいたと思うが、あの味は私の舌を今も離れない。茗荷を探して採ってくるのが私の役目であった。

お盆にはお寺の者も当然お墓参りに行ったが、歴代の住職の墓があまりにも小さくて地味なのに驚いたものである。祖父は二十九世であったから、開山大和尚の墓を中心にして、

左右に二十八基の墓が並んでいたことになる。

歴代諸大和尚各位への供物は、洗いに米に線香を細かくして混ぜた物でそれを里芋の葉の上に載せて供え、『舍利礼文』を誦した。旧暦八月十三日の夕刻であった。

檀信徒の墓参りは十三、十六日の四日間であったように思う。

は世事に多忙で思いもしない人生の深い意味に触れる時と思わざるをえない。「死」とは何か、「先祖」とは何か、そして「自分」とは何かという永遠の課題に出遭わざるをえない機会でもある。

人は誰しも「病氣」を避け「死」を忌む。しかし仏教を開いた釈尊でさえ、病いになり八十年の「仏生」を終えらる。その釈尊は「生死」について「人間とは結局何か」という課題にたいして究極の答えを示してくれた。

お盆のお墓参りやお寺詣ではこの答えに触れうる、またとなない機会である。私たちはよく「命あつての物種だ」と言う。「物種」とは「物事の元となるもの」である。

日本人にとってお盆とは、故郷とつながり、自分とは、家族とは、そして人生とは「何か」を考えてみるまたとなない機会であると言えよう。

今や多くの方にとって、お寺や僧侶と接する機会は大変限られたものになってしまいました。数年に一度、親戚のお葬式や法事で読経や短い講話を聞いたとか…。仏教と交流する機会がその程度しかない人も少なくありません。しかし私たち僧侶がゆつくりと外の世界を見渡せば、実に様々な社会問題が蔓延し、その全ての背景には、幅広い年代における「孤立」を抱えた人々が浮き彫りになります。生活様式や時代が変化したこともありますが、独居・貧困・虐待などの問題を抱えてしまった人は、どこに行けば安心して生きられるのでしょうか。そんな人々にホッとできる場所を提供できるとしたら、それはまず寺院であるべきだと思つています。社会が疲弊し、人間が苦悩を抱えている時代なのであれば、そこから目を逸らさないでいることは宗教家の務めだと思ふからです。

私がおあずかりしている長寿院でしていることを例にあげると、まずは「門を開けること」だと思つています。何も難しいことはありません。わたしは長い間、自殺志願者に生きる意味を感じてもらえるような活動をしてきました。長寿院には、非常に重たく深刻な問題を心に持ち続けている方が多くいらっしゃいます。電話番号も解放していません

寺離れ・仏教離れ。僧侶ができることを問う

ら、毎日電話がきます。今にも自殺を実行しそうなとき、最後の勇気と希望をふり絞って電話をくれる人がいる。今の若い人は自殺と言わずに「消えたい」という表現をする人が多くなりました。消えてしまいたいと願いながら一杯の気持ちで電話をくれたことを讃えて、「待つてから今からここにおいでなさい」と言える場所なんてお寺くらいじゃないでしょうか。



聞き手 柳澤 円

長寿院住職 篠原鋭一 老師 インタビュー

それほどまでに全てが産業化してしまったわけでしょう。都市型生活がほとんどになり地域コミュニティは事実上の崩壊をし、孤立が蔓延した。残念ながらこれらはわたしたちが引き起こしたことであり、何もしないわけにはいかない。子どもたちに希望をもつて生きてもらうためには、希望と共に日々生きることが見せられる大人が増えなくてはいいかもしれません。

専門家の統計にも出ていることですが、心を病んでしまった人が自死を考えるのは、まず曇り空の日です。時間帯は夕方五時から七時頃。少し飛んで夜九時過ぎ。次は夜中です。例えば深夜二時頃ですと、もう今にも実行してしまふような人から電話をもらうことがある。少しでも話せるようなら気が済むまでお話を聞きます。そのうち落ち着いてくると、今から行つてもいいですか、と言ってくれる。タクシーの運転手と電話を代わり、場所を説明して、長寿院に到着するのは明け方四時頃になることもあります。そうかと思えば突然お寺にいらつしやる方もいます。どういう流れであつても、来てくださった方にはお茶を出し、やはり気が済むまでお話を聞きます。中にはしばらく何もお話しにならない方もいますし、その場合はただ体を休めることを勧めることもあります。話したくなつたら、お話をうかがいます。

お寺と企業の新たな可能性

生きづらさを抱えている人は、実に様々な問題を一人で抱え込んでいることが多いんです。あらゆる問題をめいっばい溜め込んでしまつて、問題がこんがらがって複雑化して、とても重たいものになつてのしかかる。そんなものを背負つて生きるのは、誰にとつても辛いことです。僧侶としてはもちろん生きる工夫

をお伝えしたいのですが、そこまで生きづらそうな人はまず、縁側に座つてホツとしてもらうことが必要です。自然の雄大さを再確認してもらつて、温かいお茶に心を緩めてほしいと思つています。そして抱えているものを、一旦出して苦悩の中味を整理することを手伝うのです。一つひとつ取り出してみると、こんなもの捨てちゃいなさいよ、と言えぬものもあります。もちろん心理状況がどんな状態かは丁寧に判断する必要がありますので、急いではなりません。中には、問題を手放せることすら考えられなくなっている人もいます。もしくは、誰かに対する恨み辛みを抱えていたり、何かを成し遂げなくてはという重責に潰れそうになつたりしている人も…。無意識の中では「手放しても大丈夫」と誰かの言葉で軽くなるときがある。私にできるのはそういうことなのです。これからです。寺で二泊のショートステイができるようにしたいと思つています。時間を気にせず、この大自然のなかで心底ゆったりしてもらえたら良いし、またいつでも来れる場所があると体で実感してもらいたいんです。それから、都心の企業や団体とパートナーシップを結びたいと考えています。近年、従業員の人間関係や、精神的なケアをするために福祉課を新設したり、カウンセラーを常駐したりといった企業が増えてきました。マインドフルネス(瞑想)などが盛んになる

命の対話、重ねてみますか？

またお盆の時期になると、多くの人が先祖供養にお墓を訪れますね。私たち僧侶は、お盆は命のつながりに感謝する日であり、先祖への感謝は、同時に今ある自分の命に感謝することである、と伝える役目があると思います。お盆は、命の話をするいい機会じゃないですか。かつてお世話になつたキリスト教の神父さんに「日本にはお盆やお仏壇の文

一方で、それでも、従業員の中にはどうにも苦しくなつてしまふ人もいます。急に仕事に來れなくなり、その後続けられなくなつてしまつては、企業側も人材の損失です。そこで、私たちがそのような企業と契約をすれば、従業員さんが交代でお寺で過ごす時間を提供できます。運営費用は企業に負担してもらい、ここでどう過ごしたいかは自由です。別に読経や手伝いをせず、山の景色を見て休んでもらつてもいいし、お経を読みたいなら私と共にやればよい。目的は、都市型社会で疲れた心と体の疲れを取ることで。本来であれば、個人が自らの仕事で自己鍛錬することが、我々僧侶でいうところの修行にあたるわけですから、再び会社に戻つていい仕事をしよう、という精神状態を保てるようにすることが重要です。取り返しがつかないほど大きく病んでしまうのを未然に防ぐ協力ができると思ふのです。

	和訳	語句の註解
摩訶罰闍耶帝	偉大な勝利者よ、保持せよ、保持せよ。大地の主(観自在菩薩)よ。	「もこ」(maha摩訶)・「ほじゃやちい」(vijayante罰闍耶帝)で、マハーヴィジャヤンテー(mahāvijayante)「偉大な勝利者よ」という呼格。不空訳『青頸経』(No.1111)では「摩訶引尾演底」とする。
陀羅陀羅		「とーらーとーらー」は、動詞√dhr(保つ)の命令形(dhara dhara)「保持せよ、保持せよ」であろう。
地利尼室佛囉耶		「ちりにー」は、大地の神(ダーリニー-dhāriṇī)。「しふら」は、主・自在神(イーシュヴァラīśvara)。その複合語の呼格が、ダーリニーシュヴァラ・ラージャ(dhāriṇīśvara-raja)「大地の主よ」で、シヴァ神、すなわち観自在菩薩を意味する。
遮羅遮羅	発動せよ、発動せよ、穢れを離れたものよ。穢れなきものよ。	「しゃーろー」は「動く、行く」を意味する動詞√calの命令形チャラ(cala)で、チャラ・チャラ(cala cala)は「発動せよ、発動せよ」となる。
摩摩罰摩囉		「もーもー」(摩摩)はママ(mama私の)、「はーもーらー」(罰摩(摩)囉)はヴィマラ(vimala)で、「私の穢れを離れたものよ」となる。なお、不空訳(No.1111)では「尾麼攞引麼攞」(vimalāmala)、つまり「穢れを離れたものよ、穢れなきものよ」(vimala amala)という呼格とする。ここではこの読みをとる。
穆帝囉		「はーちりー」(穆帝囉)は不空訳(No.1113B)の悉曇ではムールッテー(mūrtte)であり、同(No.1111)でも「沒喋二合帝」とする。これらにより、加梵達摩訳「穆帝囉」を「穆囉帝」(mūrtte)の誤写とみなす。これはムールツタ(mūrta)の呼格で「形(身体)を持つものよ」と訳す。
伊醯移醯	来たれ、来たれ、黒きものよ、黒きものよ。	「いーきい」(伊醯)は、「行く」を意味する動詞√iに接頭辞アー(ā)がついて、来るの意味で、その命令形がエーヒ(chi)。繰り返して「来たれ、来たれ」(chy ehi)となる。不空訳(No.1064)では「伊醯伊醯」。
室那室那		「しーの」は、不空訳(No.1113B)の悉曇ではチンダ(cinda)であるが、他の文献はシナ(śi na)とする。この二つの語は併記される。ここではシナをクリシュナ(kṛṣṇa黒)の訛語とする。
阿囉嚩佛囉舍利	黒い蛇を聖なる紐とするもの(青頸観音)よ。	「おらさんふらしゃーりー」は、不空訳(No.1113B)の悉曇では、アルシャム プラチャリ(arṣam pracali)とあるが、このままでは意味不明。「阿囉嚩」がra[gavi]ṣam(貪欲の毒害を)の誤写で、「佛囉舍利」が「佛囉舍耶」pra[nā]śaya(滅除したまえ)だったのかもしれない。ただし、不空の注釈(No.1111)では「黒い蛇」を聖紐として着けている(黒蛇作繩線)と説明している。つまり、「黒い(kṛṣṇa)・蛇(sarpa)を聖なる紐として身に着けた(upavīta)」という意味で、青頸(nīlakaṇṭha)を指す。ここではその意味で取っておく。悉曇の形から、「阿囉嚩」arṣaはsarpa(蛇)の誤写。「佛囉舍利」はウパヴィータ(upavīta)に対応する。
罰沙罰嚩	毒害を滅除したまえ。〔貪欲の毒を滅除したまえ、瞋恚の毒を滅除したまえ、愚痴の網の毒を滅除したまえ。〕	「はーざーはーざー」は、不空訳(No.113B)の悉曇では(visa-viṣam毒害を)となる。
佛羅舍耶		「ふらしゃーやー」は、動詞pra√naś(滅ぼす、消失する)の使役活用の命令形プラナーシャヤ(praṇāśaya)で「滅除したまえ」。慈雲尊者修正テキストと韓国の悉曇テキストでは、三毒の毒を取り除けとしている。
呼嚩呼嚩摩囉	障害を取り去りたまえ。取り去りたまえ。	「くーりよ」(呼嚩)は、「取り去る」「運び去る」を意味する動詞√hrの命令形フル(huru)であろう。「もーらー」(摩囉)は、「マーラ」(障害māra)。ここではその目的格(māram)とみなし、「障害を取り去りたまえ、取り去りたまえ」と読んでおく。なお、不空訳(No.113B)の悉曇ではマラ(mara死)とする。この場合はその呼格として、「死よ」となる。
呼嚩呼嚩醯利	取り去りたまえ。取り去りたまえ。ハリよ。	「きーりー」(醯利)は、シヴァ神(=観自在菩薩)を意味するハリ(hari)の呼格でハレー(hare)。したがって、「取り去りたまえ、取り去りたまえ、ハリよ」となる。なお、春日版、敦煌写本系、高麗藏系、不空訳では「呼嚩醯利(唎)」、フルフリーヒ(huru hrīh)とする。
娑囉娑囉	流れ出たまえ、流れ出たまえ。(サラ、サラ)	「しゃーろー」は、「流れ出る、漏れる」を意味する動詞√srの命令形サラ(sara)。「流れ出たまえ、流れ出たまえ」。
悉利悉利	スイリ、スイリ、スル、スル、	「しーりー」は、スイリ(siri)で、無意味語の反復。あるいは擬音語
蘇嚩蘇嚩		「すーりよ」は、スル(suru)で、これも無意味語の反復。あるいは擬音語
菩提夜菩提夜	正覚したまえ、正覚したまえ。	「ふじやー」(菩提夜)は、「目覚める」を意味する動詞「ブドフ√budh」の命令形ブディヤ(budhya)、あるいは不空訳(No.1113B)の悉曇により、その訛語形ボーディヤ(bodhiya)で「目覚めよ、目覚めよ」。
菩駄夜菩駄夜	正覚させたまえ、正覚させたまえ。	「ふどやー」(菩駄夜)は、「目覚める」を意味する動詞「ブドフ√budh」の使役活用の命令形ボーダヤ(bodhaya)で「目覚めたまえ、目覚めたまえ」(bodhaya bodhaya)。
彌帝利夜	慈悲深き青頸(観自在菩薩)よ。	「慈悲深い」を意味する形容詞マイトレーヤ(maitreya)、あるいは不空訳(No.1113B)の悉曇により、その訛語形マイトリヤ(maitriya)の呼格。
那囉謹墀		「のらきんじー」は、青頸を意味するニーラカンタ(nīlakaṇṭha)の呼格で、上の語を伴い「慈悲深き青頸よ!」となる。
地唎瑟尼那	誇り高きものよ、恐るべきものよ、	「ちりしゆにのー」は、「誇り高い」を意味する形容詞「ダルシン(dharṣin)」の呼格で「ダルシニナ(dharṣinina)」。
波夜摩那		春日版、敦煌写本系、高麗藏系、不空訳では「他唎瑟尼那」とする。ブハヤマーナ(bhayamāna)で「恐るべきものよ」の意味。梅尾の還梵では、ブラフラーダヤマーナ(prahrādayamāna)「歡喜させつづるものよ」とする。
娑婆訶	スヴァーハー。	「そもこー」は、スヴァーハー(svāhā)で、しばしばマントラの最後に置かれ、「幸いあれ!」とする。

化があつて羨ましい」と言われたことがあります。彼は「お仏壇はホームチャーチだし、渋滞を我慢してまでお墓参りに行く国民性はすごい」と言つてました。確かに、日本人の精神構造のどこかに、先祖に対する畏敬の念があるとは思いますが、でも、このまゝお寺や僧侶とのつながりが薄れていったら、先祖供養の理解がほんやりしたままになりかねません。そしてそのうち慣習をやめる人も増えてしまう。僧侶としてできることは、先祖供養の意味を伝えること、命への感謝がなぜ必要かということ、それを説く機会を増やすこと。これにはやはり、門を開いて人がお寺に立ち寄りやすくすることだと思つています。だって元々多くの人には手を合わせる習慣があるんですから、形式だけの供養なら極論かも知れませんが、冠婚葬祭産業、エンディング産業関係者に任せつつ良いんですよ。それよりも僧侶として供養の話をすることこそ、実は多くの人が必要とされているのではないのでしょうか。

日常的に命の話を説くこと、そして地域の方々と関係性を深めることは、今後のお寺の存続意義に大きく関わってくるでしょう。

長寿院のある成田は、都心からさほど遠くもないし、ご存知の通り大きな空港もあります。それが、それよりも過疎化は進んでいます。わたしがここに来たのはもう三十年前です。で、当時と比べてだいぶ空き家と独居の方が増えてしま

ました。全国各地で同じようなところも多いでしょうから、このままではお寺が疲弊することはもう目に見えています。以前から懸念されていた方もいたはずですが、いつの間にか、お葬式もご供養も、「終活商売」や「エンディング産業」と化してしまい、お寺よりも料金表がはつきり出てる事業者を選ぶ人も増えました。そのことにこだわり続けるよりも、ご葬儀やご供養はお寺らしく行うことを忘れずに、そして、お寺にしかできないことを確実に実行することが求められていると思つてます。そういう意味では、長寿院は、限界集落のモデルケースとなれるように努めるつもりです。

現在は改装中で休んでいます。地域の方々が集まりやすいように、一年中様々なきっかけづくりをしてきました。合宿を企画したり、精進料理の会をしたり、修行体験、音楽会はよく人が集まってくださるようになりました。毎回の地域の新聞記者やケーブルテレビに開催告知を依頼して、百人以上は集まってくださるようになりました。毎回イベントごとに法話を聴いてもらえるチャンスです。三十分から一時間は時間が取れるはずですから、命の話、今を生きている話をするんです。繰り返して伝えないと、人はすぐに忘れてしまうのですし、大切なことは、度々交流して伝え続ける。その積み重ねを三十年ちかく続けてきて、本堂も庭も縁側も、冷蔵庫までも開放

することにしました。お寺は住職のマイホームではなく、地域の方々を中心とした「みんなのもの」にするのが良いと思つています。そのおかげで、今でもわたしが留守の間、今でもわたしが留守の間に食材を届けてくださる人がいたり、表のお地藏さんに帽子やマフラーをつけたり、お花を飾ったり、それぞれができることをしながら長寿院に関わってくださる人が増えました。本当にありがたいですし、これからは気軽に立ち寄って欲しいと思つています。特に高齢者が増えていまして、お年寄りが日常的にお願いになれる地域の核になることをしたいらいい。なかなか一朝一夕ではできませんし、悩むこともあります。と、りわけ今生きてらっしゃる方々に「供養」や「生き方」の話ができるのは僧侶のミッションでありキヤステイングです。僧侶が活躍できる時代をつくらなければ、どんどん産業界に取り替えられてしま

しれないし、逆に僧侶だからできることもあるかもしれない。東日本大震災のときもそうでしたが、天災によって辛い状況に置かれる方、振り込め詐欺にあつてしまう方、子どもが虐待されたり、犯罪に関わつてしまう方など、あらゆる人間の苦悩に目を向けるのが宗教家です。「消えたい」、「死にたい」と思っている人に、生きることを意味を説くのも我々の務めです。同じように考えている仲間と相談したり、協力したりしながら、お寺としての役割を伝えていくことが求められるでしょう。

度々、お寺は敷居が高い、という声を聞くことがあります。我が僧侶こそが意識改革を始めない限り、世間がお寺の前を素通りし続けてしまいかもしれません。この先人口減少が進み、誰もお寺に来なくなつてしまふ前に、今から手を打たなければ、次のお坊さんたちが成り立たなくなつてしまいます。ひとつ長寿院の特例を挙げるなら、戒名に差をつけられないことになっていきます。檀信徒の皆さんと話合つて、ご葬儀も生活が苦しくなるような金額を出す必要はないとお伝えしています。お釈迦様が説かれた仏教は、今生きている人に説く「生き方論」ですから、私は生きてい

る人と対話を重ね続けたい。そして、いざとなつたら、何か困つた時には、あの住職に聞いてみよう、そう言つてもらえる存在でありたいと願っています。

世の中では今、想像を超える事件や出来事が次々に起きています。命に関わる社会課題が絶えませんが、このリアルタイムに起きてい

る人々を頼らなければ、政治制度については非常に脆弱だつたということくらいです。しかし人々の行動だけで日本人が強靱だつたというほど話

ず、日本の死者数は欧米に比べて少ない。振り返つてみれば、結局こうした一連の事象については未だにさっぱり分からないといえるのではないのでしょうか。分かつたことといえば、日本の人々がもつている強靱さに対して、国家としての社会制度や経済制度、政治制度については非常に脆弱だつたということくらいです。

しかし人々の行動だけで日本人が強靱だつたというほど話

哲学者
(元立教大学大学院教授)

内山節 インタビュー

人々の強靱さと 社会の脆弱性が 露呈したコロナ禍

聞き手 柳澤史樹

二週間経つても三週間経つても患者数は減りませんでした。このように、コロナウイルスについてなにかを証明するデータも否定するデータもないまま、非常に横暴な専門家の論理が通用してしまつたのが現実なのです。

また、今年テレビに出ている専門家と呼ばれる人たちは、一部をのぞき「厚労省のスポークスマン」「医療政治のボス」というような人ばかりでした。本来ならば専門家とは、医療体制や検査体制の不十分さや、検査キットの不足など、国に対して意見をいう立場であるべきなのに、政府に徹底したイエスマンで、国民に対して脅しをかけるという始末です。

このような「役所系学者や官僚」は残念ながらこの世界にもいます。日本の役所は終身雇用制で、上を目指せば目指すほど権力争いが激しくなつていくという構造のため、正義感がある官僚や学者はいることができなくなりま

す。今回のコロナ禍は、そういう人たちによつて管理されることを多くの国民が望んだというのが事実であり、それがまさしく日本社会の脆弱性を象徴していたといえるでしょう。

今回のコロナ禍は、そういう人たちによつて管理されることを多くの国民が望んだというのが事実であり、それがまさしく日本社会の脆弱性を象徴していたといえるでしょう。

「コロナウイルスによつて、私たちは日本社会の非常に厳しい現実に向き合わされたわけですが、そのような社会は今後変わると先生はお考えでしょうか？」

残念ながら、驚天動地というほどの事象が起きなければ、社会は大きく変わらないと私は思つています。先ほどお話しした一四世紀のベストのときはかなり大きな社会変容をしましたが、その変化が最終的に仕上がるまでに実に四〇〇年以上かかっています。

また、新型コロナウイルスの蔓延は、一面では「社会的感染症」という性質をもつています。アメリカでも、階層的に言えば経済的に貧しい人たちに感染者が激増しました。その階層的、いかなれば「アメリカ的な固定的社会」が今回の爆発的な感染を作つてい

ません。収入や価値観、生活の仕方とは関係なくいろいろな階層の人が混在して暮らして、それが特に反目し合うわけでもなく許容し合つて暮らしてきてきた日本社会の強靱さであるともいえます。しかしいまの日本は、四〇%もの人が非正規雇用で、六〇%が安定的な暮らしをしていないという社会構造に変わつてきてしま

「特定社会」にこれから変えるヒントがある

「社会が変わるといふのは本当に大変なことですね。日本でも「同調圧力」や「自粛警察」といった言葉が生まれたように、国民同士でもいろいろな軋轢が生まれたと感じていますが、それはなぜなのでしょう？」

欧米の場合は強力な罰則、いわば権力の力によつてロククダウンを強制したわけですが、日本

「私たちが生活スタイルを工夫していくことが求められる時代に、宗教が果たすべき役割、私たちの心がけることについて教えてください。」

既存の宗教が多くの人々の心に響くメッセージを出せているとは思いますが、宗教者として発言をすれば、社会と軋轢が起きるときもあるわけですが、日本にはそれが無い。テレビに出てくるお坊さんも「みんな

社会は驚天動地でも 変わらないのは

特定社会に 変える

人々の強靱さと 社会の脆弱性が 露呈したコロナ禍

私たちが生活スタイルを工夫していくことが求められる時代に、宗教が果たすべき役割、私たちの心がけることについて

私たちが生活スタイルを工夫していくことが求められる時代に、宗教が果たすべき役割、私たちの心がけることについて

私たちが生活スタイルを工夫していくことが求められる時代に、宗教が果たすべき役割、私たちの心がけることについて

編集後記

藤木隆宣



新型コロナウイルスは世界を巻き込み、経済、医療、私たちの生活までも変えようとしていきます。当然お寺の在り方や、檀信徒の方々とお寺とのインターバルも変わると...

でもいくつかの葬儀やご法事がありました。葬儀の参列者は一〇人未満でした。今までも3密を考えると致し方ない...

「ご先祖さま」を想い、うやまうまうまが組み込まれていると考えます。お墓参りを通じてご先祖さまとの対話から...

てまり学園 寄附者御芳名 R2.4.16~R2.8.5. Table with columns: 所在地, 寺院名(個人名), 金額. Total amount: 107,000.



狂言劇「附子」(ぶす)を演じる子ども達

仏教企画発行の刊行物. List of books with prices. Includes '修証義' series and '曹洞宗檀信徒必読' series.

玉崎千鶴子 俳句随想集. その永遠の世界を探って. Advertisement for a book with author details and contact information.